国立国会図書館　　娜真都翳喜 4編 208-705

ガラス使用

国立国会図書館　　娜真都翳喜 4編 208-705

ガラス使用

孝女貞婦娜真都翳喜初編下之巻

江戸　狂訓亭主人著

第五回

凡浮世の吉凶定めがたきが常なれど憂事あれば身一ツにかゝる悲しきなかのことと思ふ歎きの人公世をも他をも恨があれど望き纔しき差別なくおもふに住せぬ苦の世界と悟らばとても事を厭し時苦を始バ花咲喜に合ぬまことが長き月日にあらうぞやハ夏に孝女お増が以前の住居珠川の地主をバ主義に住

国立国会図書館　娜真都翳喜 4編 208-705

ガラス使用

万屋と称ものありしが同じ様なるまなしあり元来彼地
ハ嬉しき事なれども分限者なりとその名を知られし大商
人家の娘ハ十八にてちらにまれなる容顔よし近所の評判
ものありしが此程何ゆう苦労なる心がりが幸せことなり見
世の招なる小産家に一人しまんがりもの思ひ表の方ハくろ
堀を言くかけたる庭のさま見ハくれてもあまりさえ
しまびに居たる折しもやたしう隣の門に今宮古路節の
軒修行が調子なれしく聲うるハしく

玉下ノ一

「おまんハ年ごのもの思ひ七夜でまなれて是
たちの十三年長が二夜ハ迄ハなるへちよつて
加賀笠に小風呂敷や白菊法ものもな
こゝにもおしつこ「なんハ行末長なづうこれを
持ておちまで候てこも「アハおふつさんに問
しやんしたら迄やうなれてこら何とせう今
に御主人の手にいりの琴助が乗りませう
あの人つれてどぎりませ「イヤくかゝ様が去様

国立国会図書館　娜真都翳喜 4編 208-705
ガラス使用

ふにぎる中早う出さいといふ所へ。「アヒ」とあく
うへ今ぐらうら出さ動くるゆへなるぬぞと笠
もふろ悪花も発なげ「ち来りをさしてよ
けりやむすこが来るまる今日ハ生方の嫁への
結納の便が来るまぞで代中支妓が用意して勝
よ枠よこせ母ぐらぞなくこの目ゆへ生ぬのうゑ
むしこ母ぢぞハ七才の年までの母ひく支から
代方十何年といふものハこがせるで生きうふせ

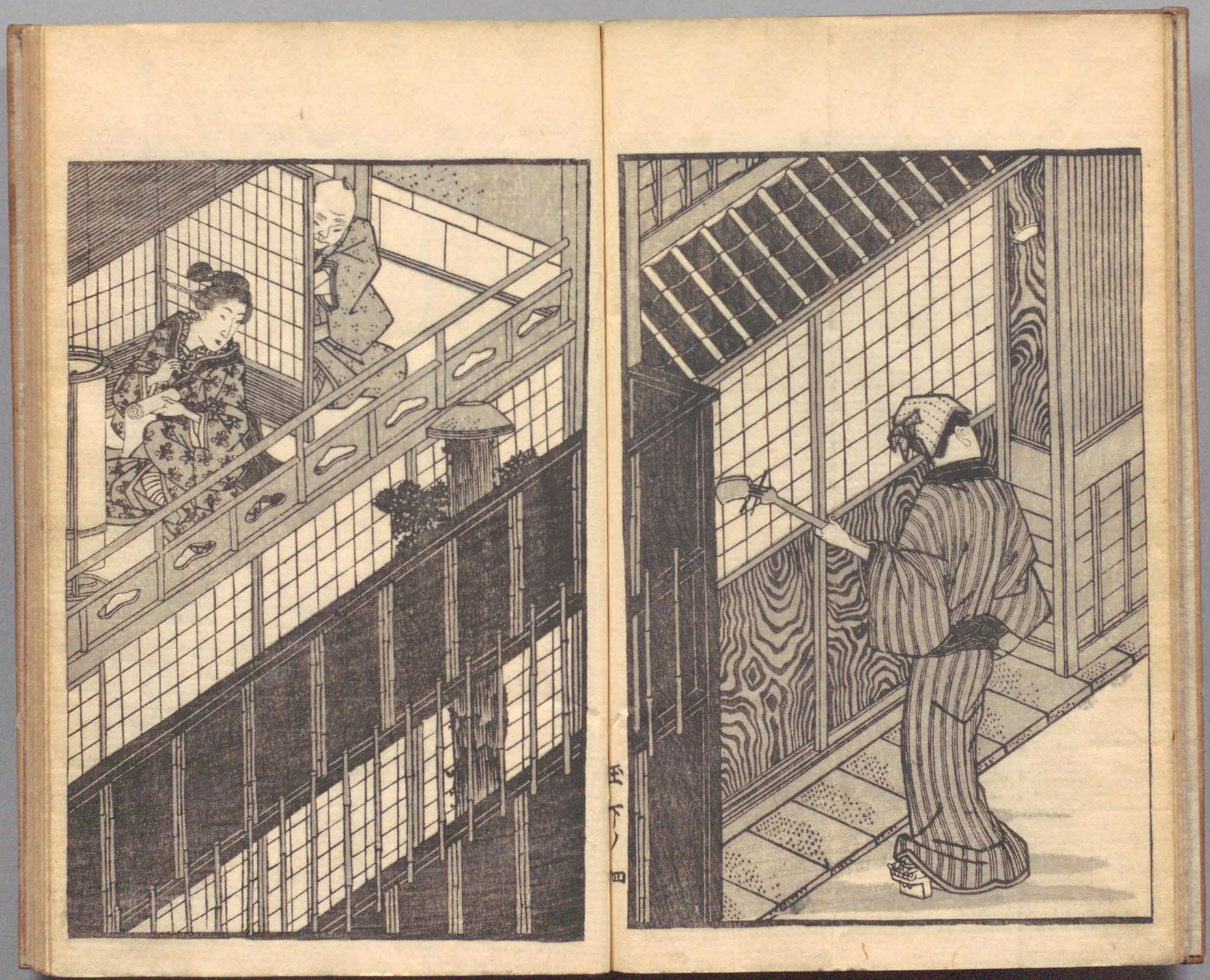
こけが延さと思ふぞ十月の宿とそりハせね
思ふぐをしてそこいかまうの母ぢぜうつり
をる。地獄ふ居るか何所ふぬるうるもせね
孝行をせうよりもコレくこのまさ死ふ
ぎろくぎろつく此母ふ孝行なるもの精を
もとりむいて今日ハふつこりと笑ふてなぬぐき
ものでも祝ふてこもまうハりゆハ中略「そうを
かりこ母さんの十三年忌の墓来りが支ねど

国立国会図書館　娜真都翳喜 4編 208-705
ガラス使用

とぶんなりまたら女一ぬハおまへの外呼ぶ事強う
ごぎんも母さんとこのとこに奥をかしあてて恨
て歎きの至中にけふ今日のなき母を志てふ
涙ぞまさり乃る。ヲヽなる程婦人が志ともなくハ
させまい一切男をもこぼにいゆるか。ドレ〳〵
奥へ申う。ヲヽいゆさうな親ドや 下畧
「ヲヤめづらしいこしらあまへハ加賀出史が弟をなれしと部
内の小まん源天兼志らもはしと仙よりの名あまへらう

とまへバまづ私ハたるゝ小兼なるでハあまどト獨言いふ後
ろの方「おまんヤ「アイお爺ざんかへト立を親父ハ押とゞめ
「アイヤ生平へ性から立ぞといて外でハないが先刻も母アの
小云ごが義理あるごけに どうもおまへが思ふ事にもなる程へ
が毎まへハどうしても否か何をいふも本店といふものごろ
所るのも面倒なまつろごどうせうナア「まことに私がコンがまく
からおまへさんにまかぐ古苦労をかけてトさきが親子の中
ながらきのどくなまへバ志れしと「どうぞ堪忍してかんな

国立国会図書館　娜真都翳喜 4編 208-705
ガラス使用



国立国会図書館　　娜真都翳喜 4編 208-705

ガラス使用

さいまし 父「イヤ〳〵 今の苦労よりこれからさきの生苦労ハ
どうせうかと思ひて居るトなるぞぐむ「ヲヤおとッぎんこれから
さきの苦労とハ 父「サア志るまいとおもふがまへの心の底といふ
ハおもふるがかなハぬ時ハ死のうとの覚悟であらうがノ「アヽどう
してそのやうな 父「志らないるがあらうかさいと二人のむすめが
死なうとまぐ思ひつめて生方の心底をしとしりて聟をとる
の嫁にやるのと得手なるまぐりぬるものを呼なぐしておくも
入夫の思しさてへ来てから生方をバ後ぐまなして連子

玉下ノ五

のまうなさそれを誠の娘にして猶をとるとのまうらひも
内心ハ悪くとも表向ハ生方のこの弟に本店の二男子西衰
ならぬお巻が女房の名まうらひ吾ぐあらうが治心してどう
ぞといひこいるまなれど無理にさうして来とげぬおし付業
もからいさうどトいはれて娘ハ思ひぼも ワアット一聲泣いぐ
せしが口に袂を押当てやうくにあらへつて「おとッぎん堪
忍して下さいまし 母店さんのおつ志なる通りにいたしまし
おまへさんにまで生やうに店苦労をかけてハ私にぞちがあさ

国立国会図書館　娜真都翳喜 4編 208-705
ガラス使用

りまはことへどんなにおもふるがあつてもおまへに不孝にな
りまはらう死んでもそまはあきらめて「コレサ〳〵そまは大
きな恩は遠ひ至方が死んぐ宜ものら他の名目を請はいで
丹誠也ゑに以前より身上は仕あげても代人はしらぬるぢや
から亭主了簡次第にともいはまぬ今の口惜さトもとし
なほどおゑ「コレ恩ぞそらうが結納の立合せをせぬ中一
且此の家を逃てしまや「ヱイ「ハテ不役でいあるなほど左
様も為様バ男親のおまが口から本店の息子を否といいは

玉下ノ六

ましませばおまきも例時の調子の門気地否といへバそまとそれ
いびり都しも志らぬ根生どうで病身になつたおまは長命
は出来まいおまが死んぐ詰ぐお巻にいぶさまるも前の難義
を今ッから見透せやうどそまより今歌かあしと悟らまない
やうにしらぐをして何所へでも立退てしまやト 美無いとふられて おやのなさけ
をきてうましくもまと いるさらにかなしくなり「モシさうしたら是限りモウおとッぱんにも
めつたにハ逢まるやうにもなりまはまいおまへがたんと病気が
悪いやうな節看病もしるるがなるまいかと思ふと思しく

国立国会図書館　娜真都翳喜 4編 208-705
ガラス使用

なつてどうもてゝを離まるのが 父 そりやア生方よりおまが
むいなれのるゞだいたりし 粗こゝにもる人のないよゆく又援
ゝる絵もとげない浮薄なゝてまも苦労なまへの身の上
アリ 徇がいてくなるト 娘にあまきハ爺の常附ハ生活
楽弱なる女房お巻にけんしきをとらましのこゝ意通
こゝ余半に年若をなもなるべし 娘ハいとゞ出しさのなと
されこゝね 徇の女こそらき 新場の向例又りや前の新内ぶし
いつそうちを走うかプイヤ〳〵 源公和さんも同

玉下ノ七

うげのお身その上に若をなけてハいとしい人の
身の大事問詰合をもるものをけいハどうして
其中喜んせぬ爺さんを唯で変改してもら
ハふか内の者ハ身にならだ心のあやこ友ハなし
なんとせうせうとせうせうせ涙に幸もふき
がり 座敷のうちをうろくと立てり居てり
なくばかり娘ごろぞあいまなり

父 サア おまん心をさゞめてあいさつを志ないかもあべ〳〵又も

国立国会図書館　娜真都翳喜 4編 208-705
ガラス使用

てぬ男なら大事におもふ母まへの亭主当分他所へ立退て
仮に世帯をもたまるべらぬの元手ハおまぶ才覚ぐ、おまぶに
志らせぬ金の都合何らの支度衣類をも二度か三度に出し
こゝゆりやトのとる方なき父の義興見世の方へとゆく後を
きづむ娘のうましさも親にはうるくうきまゝとにまたもやそ
とに泣倒まして生解なくぞ見えにけり

○そもく一二の巻に志ましたる、お増の苦労とハ
生おもむきのかはまども親子の情合ハ負しきも

複雑なるも同じ事にて、そまくの苦労ありて、
お増の孝心とお方の父情にて親に苦労をかけるの
と一ッにいふべきなるなら稱ど、お方も義情の中に孝心
且又此後にいたりて情人の為に年苦を厭ハぞ命
を捨てる男をもたんと思ふたびに一度ハ親の目を
志のびしいたづらハあまども既に錦を捨て遠に
産になまバ心を一にしてるし目を悔まぞとま
大丈夫のなを所にて操もぞしき女徳といふべし

国立国会図書館　娜真都翳喜 4編 208-705
ガラス使用

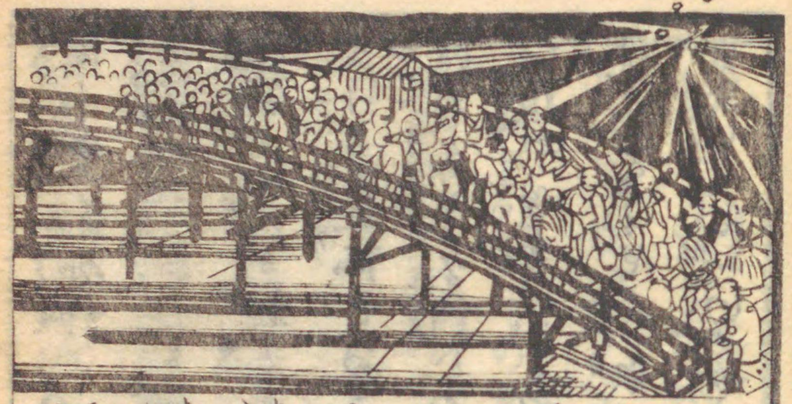
粗屋くりしきハ次に出るせし條下を読て感情
あらんか

第六回

日にぬまて月に身をわせ夕せぐこも
まて汗なかも涼の繁昌いふも文章の
まぐらにしけまバとにならべて出るもに
およびぬ画工のちからをこのことなし云
業がきにうつものこ

▲男 エコウ 近所に居て毎晩素見して

玉下ノ九



ある夜やゝ深しくも夏が山の夏の方
から来たり田舎からたびめてなぞと云
人ハ癒を濃せたぞの ●男 イヤ 私と菜や
ゆハおどろくが花火をバけなして嬉しく
ぜ入里の東ぐ花火をあげこの三里の耕
地ぐ花火を催しこのと又ヶ村十ヶ村
祭のあつめ銭をして花火をあげるのと
毎晩のなぐさこにちよいと上る花火と

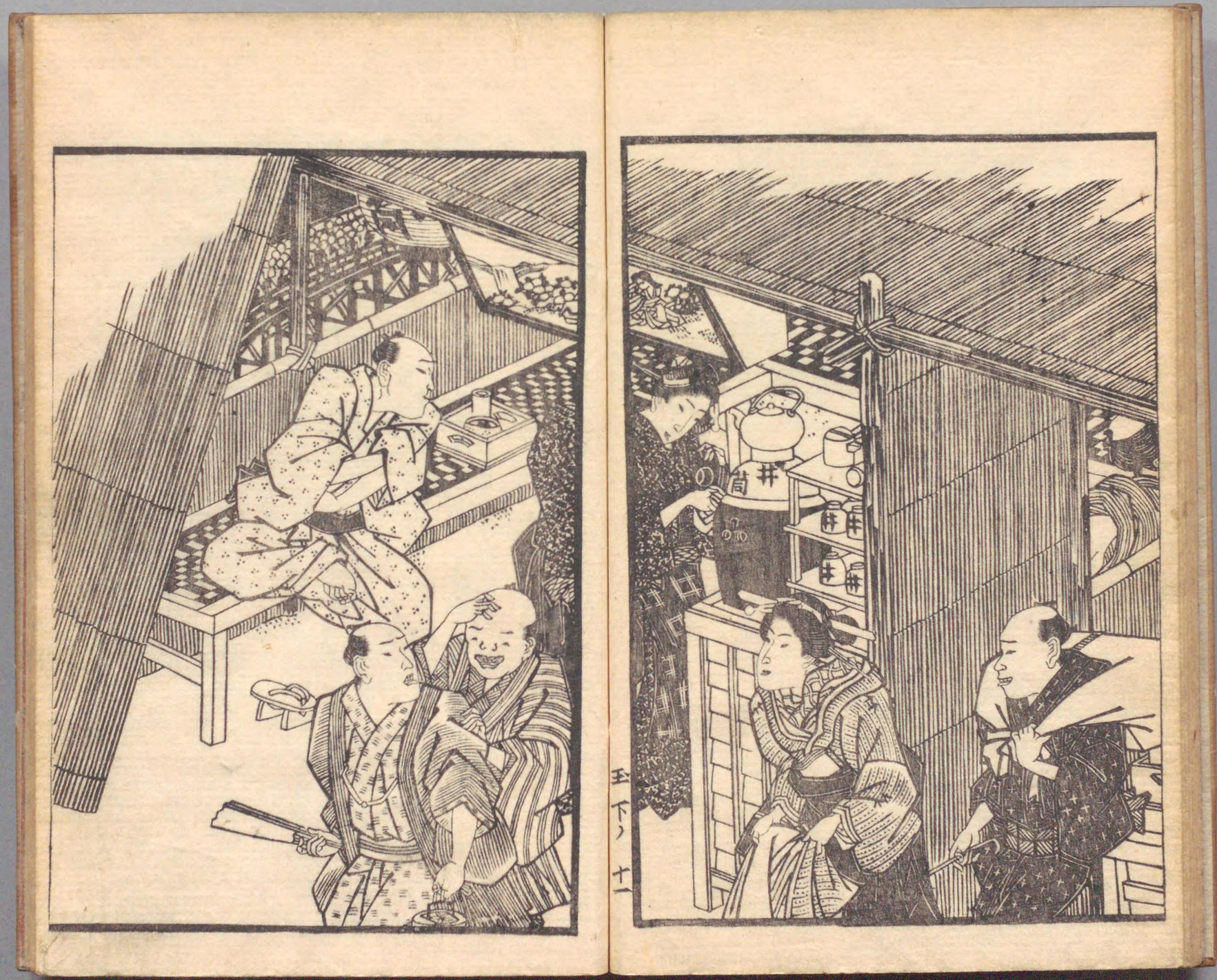
国立国会図書館　娜真都翳喜 4編 208-705
ガラス使用

同じ母ゝに知れて煙草にいやアがるからいめへましい「なるほど
花火でも祭でも田舎も一る廉にやアなら祭へが一年中此
娘母ゝに人が押合てあるくのとたいいも祭へものを小屋を
かけて連執をならしたり大聲を上たりして二メ三メの
銭を毎日とる訴へあるめへ「そりやア遠へ見へのサ是といき
な娘や唄女のぞろしくと行遠ふ母ゝにあるく訴も此去
地にかぎるぜ今我ア見見へ不動さまごからなれいて女が
出かけるぜ「いゝ女といやア裏川岸から出る唄女のお場と

玉下ノ十

動六が娘の動太が母ゝな好な娘ハ祭へぜ「ヨツトまゝごまゝ
母ゝこのおまんさんにつゞく人品な娘ハあるめへこゝらし此
頃日ハいつもの乾敬に引かへてふさぎの虫や赤蛙ごゝ「[illegible]
ふさいでゝ居るのが一しれかいつしく見えるぢやア祭へかエ
コウお方さんなぜ此方ア調子がこりのノチト自惚ごが此方ホア
善がらまる連中でもなしなんでもよくし舞がりなるかが
あるのごゝ「さうヨよくぞ苦労があると見えるがぜんてへ
おめへハ舞がちひさいぜ揚弓場や茶見世の娘がおめへの母ゝ

国立国会図書館　娜真都翳喜 4編 208-705
ガラス使用



国立国会図書館　　娜真都翳喜 4編 208-705

ガラス使用

に正直だやかいけ見へなんでも出たらめにしておくサ見世へ来るお客のいふ事を気にかけて手にして目にや隙限は見へ「イヤさうだが三十二文の兼代と小物の大小ぐ情人にある事の侍見へヤ何ぐいつまでも注ぐ居るのにもおまるヨノウ「ヨヤ嬉見しておくまた無をだそぐ口もきらないがおらいらぐ不あいそにして紙でハハット おもふるがあるヨ正直ハこの十日だらりハ織にくし苦労なるがあつて新しく見せへ出て居るそらハないハそまでどうツイお

玉下ノ十二

客へも廉末にあるヨトいひながら ホロリと落先演の事さで何となく哀しげに見ゆるも美人の電敬なるべし地出りの若尻も事の毒になり「その苦労も大畧知つてゐるがそまをいふとおめへの見世の形ニにもなちうしいふ風雅でも出る事に思ひまてもまりいふ知らぬ風をして居るが実ハおめへの苦労の始末今雅義を出る友さんの身のうへもまんざら知らぬ中でハなしおいら遠の事にこゞく事なうどうでもしてゆりてへが何をいふにも筋の

国立国会図書館　娜真都翳喜 4編 208-705
ガラス使用

国立国会図書館　娜真都翳喜 4編 208-705

ガラス使用

国立国会図書館　娜真都翳喜 4編 208-705

ガラス使用

国立国会図書館　娜真都翳喜 4編 208-705

ガラス使用

ふしつけもせぬ世帯の苦労他のきげんのよしあしに
付て手がほな此薬見せおもひやうるゝ其方の身の上どう
やら身も世せてやうなさぞ何うの不自由なゆゑうまゞ其方へ
ふしゆゑ嘆ちらりと吹てもギツクリと狗にとらへて棄じらは
手をいてあるを知りながら嘆くめハんのようとびそは見さる
うといふぬぞより此方も家悔ぞきるぬ風俗棄じぬまぞの
動歯もおほぶ後ハないるとまへハ知ってゞ居るゆゑ
ど世界の元へハ縁切と親子の中ゆゑ悔をいふ人もない

のが口惜さ嬉へ身てもツイそはと逢ことなるぬ世界の身
まへ附ハ是ハ山の身うら河へまゞとの水薬なこ吹ても
何やら家名さへ志らぬ娘の在所二三度とを往戻りしく
やうくし其方を見つけたのぢやトいふまへおまんハ勇嬢
ことも思ひぞワアツト声をあげ父の膝へまゞり付不孝
な私をそのやうに棄じておくはの勿躰なき嬉思しく
下さいましいろくしたいるがあつても忠しいと嬉しい
のぞもものがいふまません美でハないかと思ひまたトいふ

国立国会図書館　娜真都翳喜 4編 208-705

ガラス使用

玉下ノ十六

玄の素も涙にくきことり難き爺親ハ娘の脊中をさす
りながら父ハ悲しうちうちのことばでかマア泣ぜとも何うの
事をかくさぜとお泣しや世間の人の噂でハとてもうるハぬ
やうなまどまさうに母まへが見立て夫よりやさういふ事でも
あるまいまるの友達にぞなさまてまきぞへさまて事なるべ
どうかあかりのこの仕様もあらうコレ泣ぜによゆく思案を
しやおまも折しく来るからにハもてしハ力になるむ志かし
いてでもそなさまいマアそろくと見せでも仕舞やと涙

ながらにさしづせり。さまバ動尚請し父親のこゝぢまて
慈悲のいと深く見世を仕出せた源姫稲荷屋といふ料
理屋の二階に伴ひさし向ふ娘ハさまが身拂身を今さう
悔ミ弄の毒さうに「まことにモウおとゝぶんへ此苦労を排
こだちが尚ゆく苦労なるゆだかり出来まいヨ父ナニくそ
まもゆくそくゆまるのゆだかりありもせまいまこ親が家
子にだちをあてゆうと思ふものゝ別て其方ハ此親が母の
仕打をみんなこゝろ所詮始終がおさまるまいと来を見越て

表向動歯しともおもしが慈悲そりやアともうくも苦労に
なる先刑のもなしいよくあの人が知らねるでまきぞへ
さまてこまけなるべ友達の志うちがにてともそのお屋敷の
屋敷の金を此方から無へて上るといふ格にしこなるだ
どうか友次郎の身だらりも免して貰へるにもなりうら
とはいふものゝ人を他目ぐつらねるべから動歯さまて
何もかも不自由なぬ出来ぬぐ万一そんなるも志ら
さうでもあるとどのやうに金を貰つことゝ退まるといふ屋

玉下ノ十七

ハないことへ除まるるがあらても盗うりの心があれてハ
モウ人るの捨りものよりやさうでハあるまいのう「ノ工さう
いふとおいきをもるやうでございまれが友さんにかぎつてそんな
るハ変してありハいたしません「父さうならば其手順をどうぞ
お詫しくやりたい宅を出る時からその心ぐ金ハてへ持て
来たが手まへにハ持あるねハテどうしたらよからうト思案
にあぐむ其所へ階子を上る足音して二階をアルまつれ二
人の若者おまんを見付く「ヲヤ今夜ア平仕舞ご子今見

国立国会図書館　娜真都翳喜 4編 208-705
ガラス使用

せへ往ようモウ裏のおばさんが殘らず運んで志まへ所へ往
ゆくとトキニ友さんハとんだ災難を請なさつたこと先刻友達
ハ呼ゆくとが私の親父ハ畠山さまのお申きへ出入ばかり事ハ稽
子も知まるとおもつて今呼ゆくとら子私より親父ハとうハ知
つて居て子役人気のおつしやるハ内拂ものゝ代金さへおさめ人
あまたハ内分ハなさるつもりだがさもなくまたハ偽作同前だ
ゝなんぞお慈悲のお申きでも堪忍するやうハもなくこと
との咄しだが子友さんがお先ハなつたうへハ金を出すも可

玉下ノ十八
下ノ十九

廉くしいがさうし稱へともづかしくなるさうしたらマア此
所ぞ今を出して一旦淋しく無く後日まで詮方がなさ
らう　ナニ　正直の者がコウ稱へでどうするものゝ直月
出家事が来るハ遠へございませんハ子ト
粧母しくも相談して此家ハ各々別まゐる是より
二編ハ出りきおまんが実意友次郎の難をもとへひ
古今の人情をあらはしものなり

孝女貞婦　娜真都翳喜初編下之巻終

国立国会図書館　娜真都翳喜 4編 208-705
ガラス使用

楊太真遺傳

處女香

精製桐の箱入

一廻り

百二十文

そもく此御茶ハ本朝毎類の妙方にて男女に限らず顔の艶をうるはしくして生まれ変りても出来ずこれ程に色を白く肌目細にする功能あり志せるがゝ此類の茶世間に多く白粉洗粉化粉小生卵油茶などを製して皆おとゞく類の茶にするなりもこれを功能書に志るしてあれどもその書付の半分も功能迄依之此法披露を法院ドてもいつもの弘口上抔と看消ゆゑかべき事なんがこまいなるべく左根に麻来なる茶にてハ志まるべく只一度用ひ置ふても忽ちに功能の顕まる妙茶なり一廻り用ひ置ひてハ法類の

国立国会図書館　娜真都翳喜 4編 208-705

ガラス使用

208
02
705

和漢軍書繪入讀本都而貸本類
古本不品々沢山に取持仕ひ付本所
格別下直に相働差上申ひ間不限
多少に御求可申下ひ根編に等希ひ
以上

京橋南中通り弥左衛門町
文永堂　大鳴屋傳右衛門

賣弘所

色自然と桜の花の如くなり二廻り用ひたまへば必ず根に荒疵の肌目も羽二重絵の如き手傳りとなるのこなるべし。ふきび。そばかす。腫物の跡。志その類なしも跡なく治りてうるはしくなるを請合ふ。朝起て顔を洗此玉粧香をもり込てあれば此も白粉を付る根なる気色もなく只自然素肌の白くうるはしき根になるとは姫法方は以ず不及年をかさ過法方が用ゐひても目に立ずして美くなる製法ゆゑ法鏡なく御用ひ捨ばされ真の美人となりなふ事し

為永春水精製

髪の艶を出し髪垢をさる　妙薬　初みどり

あのこまりは髪を洗はぜに あらひしよりもうつくしくなる ことのうち有　代三十六文

書物并繪入讀本　問屋

江戸京橋弥左衛門町東側中程
文永堂　大鳴屋傳右衛門

国立国会図書館　娜真都翳喜 4編 208-705
ガラス使用

208
12
705

国立国会図書館　　娜真都翳喜 4編 208-705

ガラス使用

国立国会図書館　　娜真都翳喜 4編 208-705

ガラス使用